

飯野ビル全景



ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター



双日(株) オフィス 周辺の案内図

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング



地下鉄アクセス メトロ千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4
メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

***** 2018年東京社友会総会・懇親会開催のお知らせ *****

2018年度東京社友会総会・懇親会を下記要領で開催致します。皆さま、奮ってご参加下さい。

開催日 : 2018年 **8月2日**(木) 開会 **11:30AM ~ 13:30**

ご注意! 開会は 11:30AM です (12:00 Noonではありません)。

なお、会場は 11:00AM から開けておきます。

会場 : **双日株式会社本社・21階 大会議室**

東京都千代田区内幸町2-1-1 (飯野ビル内)

アクセス(メトロ) :

*千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」**出口C 4方面**へ進み、
通路天井の案内板に従って、館内エスカレーターで**3階オフィスロビー**迄。

*銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**。飯野ビル迄徒歩5分程度。

会費 : **無料** (飲物、軽食を用意致します。)

特記事項

AAA 同封のハガキで**出欠**をご返事下さい。締切**7月10日(火) 必着**。

BBB このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード**が必要です。

3階ロビーの双日受付付近で待機している社友会担当世話人に氏名を告げて、このカードを受け取った上、ゲートを入れて下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。

また、このカードは退館の時も必要です。それまでは必ず手元に保管下さい。

* その他、お問い合わせは、「世話人一覧表」記載の世話人か、または、社友会事務局にお寄せ下さい。FAXは03-6858-7216、Eメールはmenkwa@sojitz.comです。

2018新年賀詞交歓会における 会長挨拶

会 長 石 原 啓 資



新年明けましておめでとうございます。

ただいま、ご紹介いただきました会長の石原でございます。

本日はお寒い中、かくも多数の皆様方にお出席賜り誠に有難うございます。お元気な皆様方と新たな年を迎えられ、誠に光栄でございます。

また、本日は年始のご多忙の中、双日株式会社様から藤本社長様はじめ、多数の役職員の皆様方にご出席賜り、心より御礼申し上げます。有難うございます。

さて、世界に目を向けると経済は好調に推移し、欧米では金融緩和からの出口を模索している様子が伺えます。然しながら、日銀は表向き金融緩和を継続する姿勢を崩していません。本年は日銀の出口政策で振り回される懸念を危惧している

ところです。また、米国トランプ大統領の言動から北朝鮮問題、中東問題が懸念されています。一方、働き方改革として量から質への転換、我々のモーレツサラリーマン時代の考え方は全く通用せず、つまりホワイトカラーの生産性向上が課題になり、人口減少化を迎えAIを活用して単純労働の機械化が進められています。メガバンクでは向こう5～10年かけて大幅な人員削減が公表されています。仕事に対する新たな取り組み方が強く問われる時代になったと感じております。

双日株式会社様も時代の変化を先取りして着実に手を打たれていることと信じています。

本年度最終純利益は500億円を超過達成し、現在の中期経営計画当初目標の600億円に出来るだけ近く近づけるといふ気概をもって経営に邁進されているともお聞きしています。役職員皆様方のご尽力の賜物と敬意を表します。出来れば株価も順調に高くなることを期待しています。

さて、本年は戌年でございます。12年前の戌年にこのニチメン東京社友会が設立されました。皆様のご支援のお陰と改めて感謝申し上げます。

この社友会の設立準備段階から従事していただきました、長谷川副会長様、倉又副会長兼世話人代表様から昨年、健康上の理由で副会長及び世話人を辞退したいとお申し入れがありました。昨年12月の世話人会で議論させていただき、お二人のこれまでのご貢献に敬意を表し、お申し入れを全会一致で受けさせていただき、新たに副会長兼世話人代表として大山現監事様にご就任していただくことになりましたので、この場でご報告させていただきます。

会員の皆様へお約束している、世話人会の次世代へのバトンタッチはまだ道半ばですが、着実に進んでいます。然し実態はまだ世話人が不足している状況です。世話人へのご参加をこの場をお借りしてお願い申し上げる次第でございます。またホームページ刷新に就きましてもこの後、担当から詳しくご紹介させていただきますが、「ふれあい広場」を新たに設け、会員の皆様から情報を発信していただける窓口を設けました。ぜひご活用していただき、会員間の交流の場を増やしていただければ嬉しい限りです。

この社友会が、会員の皆様方の心の支えになり、ますますお元気で長生きをしていただければ、世話人会としても遣り甲斐を強く感じる次第です。

石原会長よりもお話がありました働き方改革ですが、当社においても推進中です。月の残業時間80時間以内、月に一度は有休休暇を取るという目標を掲げて実践中です。残業時間については人事総務部のモニタリングも功を奏し、浸透してきています。一方で、有給休暇の取得はまだ部署間でばらつきがあり、道半ばというところです。長年、商社マンは残業することが仕事をしているという証、という昔からの固定観念があり、残業しないことが効率がよくて仕事が出る証である、こういう意識改革を、大変ですが行っていく必要があります。特に部課長にはその点を徹底して実践するようお願いしています。

最後になりましたが、本日ご参集の皆様のご健勝を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

Nmnm

2018年 新年会にて 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1920年生まれ)

望月 昌徳

米寿 (1931年生まれ)

河西 良治 ・ 大西 勇 ・ 橋爪 覚 ・ 福富 直明 ・ 深尾 孝

欠席長寿者：

米寿 (1931年生まれ)：青木 繁行・石井 幹雄・内田 英三・海野 敏夫・大森 啓作
杉浦 幸雄・東門 申三・西奥 薫尚・松田 實



ご長寿者代表あいさつ

福 富 直 明



本日は、長寿のお祝いをいただき、有難うございました。
昭和29年（1954年）に入社した頃の日綿の姿を思い出しなが
ら、米寿代表として御礼の言葉を述べさせていただきます。
入社当時の東京支店は室町の近三ビルにあり、まだ役員室
もなく、石橋支店長や松岡常務がフロア中央の役員席におら
れ、フロア全体を見渡せる位置におられたと記憶しております。

給料日はなぜか毎月10日。電話は交換台を通じたの固定
電話、海外との連絡は、eメールはもちろん、テレックスも
ない時代で、ケーブルが主力、電信課の方々が毎朝海外から
の入電を配って下さっていました。電卓もまだ発明されてお
らず、足し算引き算は算盤、掛け算割り算は手動の重いタイ
パー計算器。それも各課に一台ずつ配置されてはおらず、近三の二階に3～4台しかなく、乗
除計算をするときは空いている計算機を探してフロア中をうろうろしたものです。社員食堂も
なかった。なんとも前時代的だったのはトイレが男女共用だったこと。この問題は1955年か
56年に改装工事が行われて改善されました。残業だけは現代のブラック企業なみにきつかつ
た。

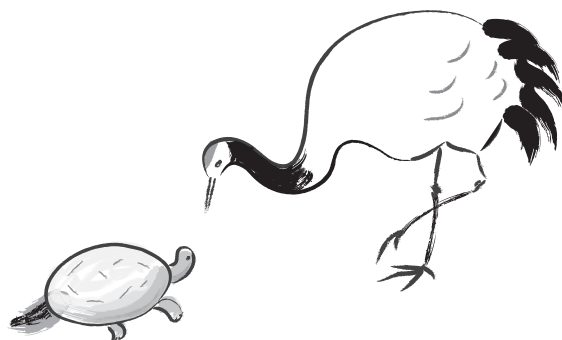
これが米寿組の入社当時の仕事環境の寸描です。パソコンや携帯を使いこなして商談を進め
ている現在の若い人たちには想像も出来ぬ世界でしょう。

1987年の初めに退職して、米国のメーカーが新設する日本法人に移りました。一から始める
仕事だったので、就業規則も作らねばならず、ニチメン退職時に社員証のバッジは返せと言わ
れたが、就業規則は返せと言われなかったのが、これを下敷きにして、立派な就業規則を作文
しました。この新会社の経営管理には1954～55年に日綿で叩き込まれた簿記の知識が役に立
ち、日綿の教育をありがたたく思いました。

あの頃、社屋だった近三ビルは解体されてもう存在しないだろうと思っていたら、なんとちゃ
んと存在しておりまして、しかも東京都の歴史的建造物に指定されています。驚いたのは

このビルが完成したのが昭和6年、つまり本日米寿を祝って戴いた我々と同い年なのです。

ともあれ、我々一同、並びに歴史的建造物の米寿到達を祝って下さった社友会の皆さまに心
より御礼申し上げます。有難う御座いました。



2018年「第11回新年賀詞交換会」開催報告

広報チーム

1月18日（木）双日(株)本社21階大会議室をお借りしまして恒例の賀詞交歓会を開催。2008年1月18日に旧双日(株)本社（赤坂国際ビル）での第一回開催から早や11回を数えることが出来ましたのも会員皆様のご協力の賜と感謝致しております。

今回も寒さにかかわらず多数の会員の皆様にご参集いただき、双日株式会社様からも多数のご来賓の臨席を賜りました。

定刻11時30分、総合司会奥村世話人の開会宣言で始まり、当会石原会長による新年のあいさつ、続きまして来賓代表の双日株式会社取締役社長・藤本昌義様よりお言葉を頂戴しました。詳しくは別掲載のお言葉をご覧ください。

引き続き、長寿会員の方々の表彰、代表として米寿の福富直明様から昭和30年頃のお仕事、当時事務所だった近三ビルも米寿を迎えて現存していることなどお話をいただきました。

津田賢一郎様の元気あふれる「乾杯」のご発声により、お待ちかねの懇親会が始まり、会場内のあちらこちらで談笑、歓談の輪がいくつもでき、お料理とお神酒を味わいながらお互いの無事息災を確かめあった。今回、初めての試みとして海外店駐在仲間の店別集合写真撮影を行ったところ、大盛況で多数の方々が大喜びで参加されたことが印象深いものでした。別掲載の会場写真をご覧ください。

午後1時半、中締め発声でお開き、次回での再会を期し閉会！



2018年1月18日現在の役員・世話人

後列左から：梶山 中田 入江 北川 大羽 赤城 木津 蛭田
前列左から：花澤 新藤 大山 石原 西村 奥村 倉持 園山

◎2018年 賀詞交歓会 出席者

2018.01.18 開催

ア (一般会員)
 青木 政和
 浅井 正彦
 東利 廣
 甘木 雄
 荒池 幸
 池田 浩
 池本 俊通
 石原 靖造
 泉伸 夫
 井田 正
 伊藤 伸
 今村 安
 岩居 隆
 岩田 宏
 上房 英
 津木 康
 大北 克
 大久保 海
 太田 弘
 大塚 静
 大西 禎
 大場 栗
 大平 岩
 岡島 隆
 沖野 賢
 小河 野
 笠原 西
 数森 原
 鐸木 森
 蒲澤 木
 唐崎 澤
 川西 崎
 木寺 信
 金城 和
 久保 厚
 倉又 弘
 栗田 貞
 小西 則
 小林 久
 小森 重
 小田 齐
 小林 靖

サ
 近藤 厚
 斎三 枝
 五月女 井
 坂井 井
 桜井 原
 笹佐 藤
 三分一 塚
 篠水 水
 清白 石
 杉浦 浦
 須藤 山
 陶曾 我
 大工原 木
 高瀬 内
 竹武 田
 田尻 所
 田中 中
 谷津 田
 富豊 富
 豊間 川
 中谷 島
 中名 部
 南西 田
 西村 村
 西村 口
 橋爪 爪
 橋谷 川
 長谷 川
 林林 本
 久廣 本
 深尾

タ
 子造 伸
 伸穰 司
 穰司 一
 一弘 朗
 朗美 郷
 美郷 人
 郷人也 之
 昭晃 司
 晃司 德
 司德 久
 德久 宏
 宏能 憲
 能憲 啓
 啓彦 謙
 彦謙 興
 謙興 郎
 興郎 仁
 郎仁 二
 仁二 行
 二行 郎
 行郎 英
 郎英 一
 一英 郎
 英郎 弘
 弘男 弘
 男弘 弘
 弘弘 郎
 郎覚 尚
 覚尚 洋
 尚洋 弘
 洋弘 一
 弘一 也
 一也 孝

マ
 福藤 富
 古家 合
 星本 田
 本本 間
 牧本 間
 榊本 間
 松本 間
 松丸 野
 三浦 堀
 水宮 浦
 村望 上
 森森 月
 森矢 田
 安山 島
 山山 武
 山本 邑
 山本 本
 川川 幸
 吉水 秀
 吉水 秀
 吉水 秀
 渡本 重

ヤ
 石原 啓
 大原 弘
 赤城 枝
 入江 隆
 大羽 陽
 奥村 一
 北川 夫
 木津 雄
 倉持 子
 新藤 雄
 園山 孝
 中西 彦
 花澤 郎

ワ
 直正 助
 之助 章
 之助 彦
 登志 務
 洋磐 雄
 磐憲 生
 邦信 夫
 甲 一
 泰昌 夫
 壽淑 純
 国陽 藏
 昌幸 勤
 幸秀 博
 邦重 生
 重 德
 郎 子
 孝 章
 一 裕
 裕 江
 江 夫
 夫 浩
 浩 稔
 稔 晴
 晴 幸

(社友会役員・世話人)
 石大 原
 大赤 山
 入城 江
 大羽 羽
 奥村 村
 北川 川
 木津 津
 倉持 持
 新藤 藤
 園山 山
 中西 西
 花澤 澤

(50音順、敬称略)

蛭田 恒美
榊山 俊次

(会員) 支援者

垣田 佐代子
滑川 和子

(非会員) 支援者

今井 惠子
 増川 惠子
 佐藤 繁昌
 原段 谷本
 藤本 木井
 茂水 村原
 松西 中田
 田此 中田
 田櫛 引濱
 高小 笠原
 加賀 井浦
 花松 本平
 船東 小林
 小青 木

(非会員) 双日支援者

大熊 恭子
村松 慶子
野村 惠子

①一般会員	118名
②世話人等	20名
合計	138名
③双日ご来賓等	24名
出席者数 合計	162名

乾杯のご発声

津 田 賢一郎



皆さんあけましておめでとうございます
ただいま、ご紹介いただきました津田でございます。

私は昭和32年、1957年の入社で、平成10年、1998年にニチメンエネルギーを退職いたしますまでの41年間、ニチメンならびに関係会社でお世話になりました。

その間の担当業務でございますが、入社当初に大阪通信部電信課に2年間勤務いたしました。さきほど、ご長寿の福富先輩から通信の革新についてのお話ございましたが、入ってきた電報を早足で営業に配信するような仕事をさせていだいておりました。

そのあと、大阪本社、東京本社および海外支店、駐在事務所等、通算26年間鉄鋼貿易の業務を担当しておりました。そのあと東京総務部で2年半、総務業務を担当しました。ニチメン定年後、10年間ニチメンエネルギーで人事総務を担当いたしておりました。

以上が私の職歴でございますが、こんかい世話人会の方から指名がございましたのは、昔、総務部を担当しておりました時に、旧ニチメン長月会の事務局を仰せつかっていた関係で、「昔の御縁でたまにはお手伝いを」との主旨のお話をいただきました。

かなり古い話でございましたが、日ごろ世話会の皆さんには大変お世話になっておりましてお断りしにくいと言うことで御受けした次第。

前置きが長くなり申しわけございません。先輩の皆様がいらっしゃるのに、はなはだ僭越ではございますが、乾杯の発声をさせていただきます。 よろしく願いいたします。

それでは、ニチメン東京社友会会員の皆様のますますのご健勝と双日株式会社様の益々のご発展を祈念いたしまして乾杯したいと思います。 ご唱和ください。

乾杯！ どうもありがとうございました。





2018年賀詞交歓会・懇親会風景



2018年賀詞交歓会・懇親会風景



お願い：

2017年度会費を未納付の方は当年度中（2018年6月末）の納付に協力下さい。

2016年度分未納者は大至急2017年度分と合わせ納付頂きますようお願いいたします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。（振込手数料は各自ご負担願います。）

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100 - 4 - 318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

(ゆうちょ銀行に口座のある方は、口座間送金を利用すると手数料は無料です。)

2) 三菱東京UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めで記載願います。
(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(注1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(注2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

石川勝美、石澤謙一、市川元久、伊藤安雄、井本公一、岩居宏一、大塚静子、大野久生、大村譲、河西郁夫、上条達雄、亀田昭、木内純一、北村俊夫、古藤彰三、近藤貞一、斉藤弥、三分一克美、新野敬一、高間宏治、伊達邦雄、南部晴雄、平岡昭三、廣瀬一彦、古川熙、松尾憲一、松本忠夫、松本靖史、松本寿夫、丸山泰三、三嶋敏夫、宮浦博、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、吉田孝生 以上 36名

<<今回、18年度からの会費が免除になります。>>

青木繁行、石井幹雄、内田英三、海野敏夫、大西勇、大森啓作、河西良治、杉浦幸雄、西奥薫尚、橋爪覚、深尾孝、福富直明、松田實 以上 13名

今年の長寿者は、49名です。

(注3) 2018年度(2018.7～2019.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

<< 今回は、振込不要になります。来年に、19年度分の振込をお願いいたします。>>

青木繁行、青木浩、青木政和、赤沢宏哉、我妻寿一、浅井正彦、東信子、新井康友、荒木武雄、幾島清、池田照幸、池本俊通、石黒由紀子、石原啓資、石原靖造、泉伸夫、五十畑利枝、井上正博、今井明、今井宏臣、入野英次、宇津木長、海野敏夫、大北克利、大西勇、大野悦良、大場禎治、大山陽子、岡敦彦、岡島岩男、岡田茂、沖田隆彦、小田有久、小野宗一、小野稔、尾羽沢正敏、勝田泰司、加藤資一、鍋木順治郎、川崎恵美子、北川幸雄、喜多嶋雄徳、木寺厚二、久芳成、窪田厚三、倉又則夫、黒川智水、黒住厚、小林正史、小林靖幸、小松繁範、古谷野和夫、坂井良司、桜井征夫、笹原弘、佐藤統次、佐藤光治、佐渡隆、佐野進、柴田実、島田俊彦、清水武人、下浦通洋、白坂泰之、菅沼利太郎、菅谷省三、杉浦俊之、須藤忠昭、陶山晃、高尾勝、高田秀子、高橋卓子、高橋正、高橋正尚、竹内可能、田尻眞啓、田所忠彦、田中偉堯、田中弘、田村達也、津田賢一郎、土田成穂、土屋秀雄、土井安之、土橋勇、富田仁、豊木啓喜、豊福清二、永井清光、中尾舜一、永田堅志郎、中谷宣英、中谷勝、中原正紀、中村静人、名島憲一郎、滑川和子、南部捷郎、西川周、西川洋、西田昇、西野幸夫、西村昭男、西村照男、庭野松三、野城恒男、野本定男、橋爪覚、橋本昌二、羽中田鐵也、林義人、半林亨、樋口龍彦、久本紘一、平井出良彦、廣田雄太郎、廣本昌也、深尾孝、藤井正之助、藤井宏憲、古家章、細谷和夫、細谷聡、堀江亘、本田務、本間登志雄、前田孝、松浦淳、松坂茂、松田實、松村森男、松本幸子、丸野純、水野英幸、溝江博三、宮尾迪子、村上匡一、村上泰生、茂木良夫、本松巖、矢島孝、安井修司、八木道夫、柳沢明、山岸正雄、山口一光、横井正豊、吉内健次、吉海秀造、吉川浩、吉水稔、若月義和、以上 152名

(注4) 2017年6月以降で 寄付をいただいた方々

廣内卓生、宮浦博、三分一克美、斉藤弥

双日囲碁部のご紹介

榊 山 俊 次

当部の在籍者は、40名弱になりますが例会への参加者は都度10から15名です。毎月第4水曜日（13：30から17：30）に、双日（株）17Fの ニチメン・日商岩井共同会議室を会場として定例会を開催しています。

大抵 一人3、4局を打って終了となります。ただし 1、2局打って帰る人や、遅く着て2、3局打つ人など色々です。と言うことで出入り自由です（町の碁会所風）。定例会を終了すると、第2の部活動としての反省会があります。一手でも強くなるためには、当然です。こちらもその都度参加できる方々で場所を変え軽く飲みながら行っております。

メンバーは、2年前に初めて石を持ったと言う初心者から 学生時代から始めて足掛け五・六十年と言うベテランまで幅広い参加者で構成されています。

私たちの囲碁部に双日の名前がついていることについて。

ニチメンと日商岩井の合併が決まったときに 囲碁部同士で、一緒にやっという話し合いをしました（全商社囲碁大会で顔見知りであったことから）。

その頃の、日商岩井はOB会の囲碁部（現役の部員がいまませんでした）こちらも実質2名の現役部員（現役で名前を貸してくれる部員はおりましたが、同じようにOB中心）で活動していました。現役の我々も退社することになり全てOBとなり、現役がいない部になりましたが双日から、名称として双日囲碁部を使用して対外試合に参加してもよいと了承を得て今に至っています。

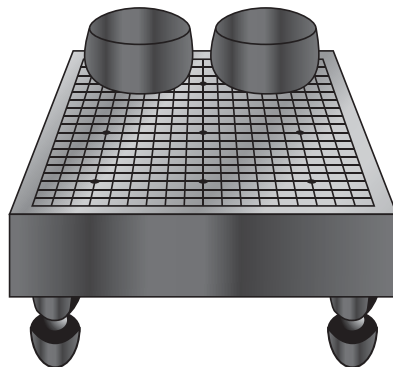
その経緯があり、今でも日商岩井のOB 1名が定例会に常に参加しています（もう一人増えそうな気配もあります）。そして、日商岩井の活動にもこちらから何人か参加しています。

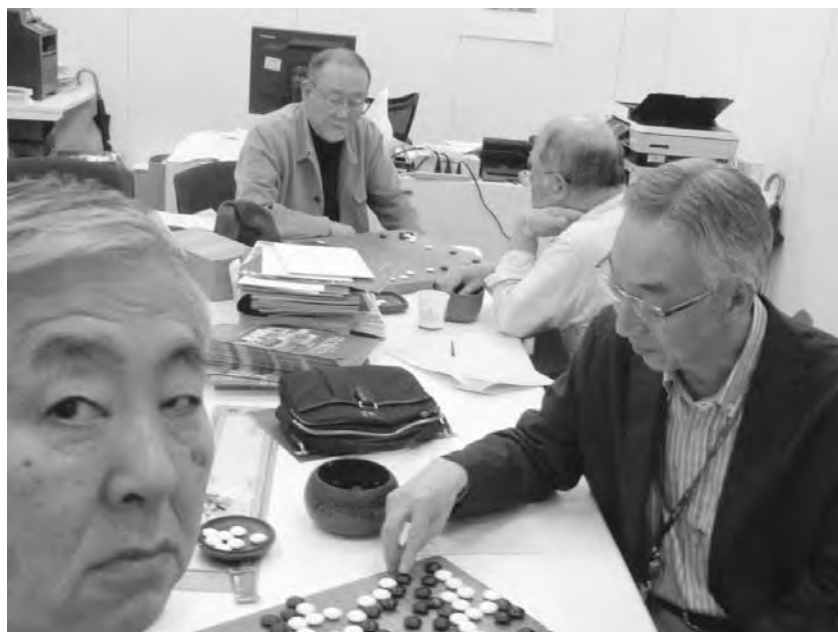
日商岩井の活動は、ネット碁（“石音”と言う囲碁サイト）で毎月トーナメント（十数名で）を開催しているのと、3ヶ月毎に水天宮の囲碁クラブを貸し切ったの囲碁大会（四十数名の参加）があります。

おまけ。毎年春と秋に軽井沢の保養所を利用して囲碁合宿を行うことになっています。

これは、二泊三日で朝から夜まで囲碁対局、その間に食事という荒行です。一人15から20局を打つこととなります。最後の仕上げが、最終日の連碁です。参加人数の確保ができずにここ2、3年は年一回に減っていますが是非継続していきたいと思っています。

毎月第四水曜部が定例会です、出入り自由ですので気が向いたら是非遊びに来てください。初心者も歓迎です。



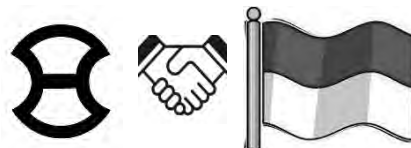


ニチメン合同ネシア会開催報告

奥村 睦夫

日 時：2018年4月23日(月)～24日(火)

場 所：浜名湖弁天リゾート・ジ・オーシャン



出席者：中村孝：ムサシ 石原啓資：化工 平沢悦郎：木材 林喜久雄：所長 穴戸由卓：木材
 村上正美：木材 菅野幹二：鉄鋼 山邑陽一：機械・法務 名島憲一郎：財務経理
 五十川暉夫：木材 山岸正雄：所長 大山弘雄：木材 奥村睦夫：木材 … 13名



皆さんそれなりに歳を重ねておられますが、写真通り至ってお元気でお酒も入り弁舌絶好調で楽しいひと時を過ごすことができました。(下記：インドネシア語訳)

Seperti photo yg. ditempelkan. Acara bertemuannya sudah selesai dengan hasil baiki2. Tuan 2 menghadiri sumuannya yg. Chkup berusia sudah tua.

"Tetapi kelihatannya masih muda kuat. Dg. yg. enak makan makanan dan minumu" minumannya. Maka achimya menjadi sampai senang berbicara ramai 2 sekali.

出席者各位のおしゃべり（宴会場、および臨時集会部屋）：

- ・債権回収に大変だったが、先輩達が一所懸命にネシアの発展に貢献してたこと思い出す。
- ・昔のネシア経験が今の幸せの源流。良くも悪くも憎めないネシア庶民の人柄がなつかしい
- ・駐在5回、38年の約半分がネシアに関わっていたという元所長は、“そのうちに日本はネシアに抜かれるよ！ 確実に豊かになっておりその確信を持っている”との自説を披露。
- ・60年代、70年代、80年代、2002年～と計12年、内地勤務も殆どネシア関連。スカルノさんとのアポウンぬんでデヴィ夫人に会い、彼女の威力と頭の良さを肌で感じた。
- ・駐在員事務所とは情報収集のためだけの存在で商売活動は不可。当時はNY店に次ぐ駐在員（長出含む）の多い大型の事務所だったし、出張員も多かった。

- ・オビ島森林開発の起ち上げ時、撤退時の対人苦勞（対ネシア人・対フィリッピン人）、買付け、原木検品の為のスマトラ・カリマンタン出張時の身の危険を感じた苦勞話 ⇒飛行機、小舟、ヘリ墜落、ポンコツ車、筏、本船荷役立会い、重機（ブルドーザー・トラックなど）の話……………
- ・神戸人、京都人は「大阪と同じだ」と言われるのを嫌うらしい。奈良はどっちつかず？
- ・阪神タイガースがダメなわけの自説披露、長州閥の話、旧陸軍の話、坂本龍馬の話……………
- ・その他、皆さんが体験した極めて興味深い話（実話？）も多く、日が変わるころまでワイワイガヤガヤと大変！ 疲れ果て早めに部屋にも戻ったが、部屋でさらに話し込んだとか……………

翌朝朝食（バイキング）終了後に次回の再会を約し、流れ解散。お疲れさまでした！

以下おまけ報告： 注）写真はジャカル在住小山さん提供、全て2018年4月撮影
ニチメンジャカルタ事務所移り代わり

- ① 1969年11月まで、ジャカルタシアターの場所にあった平屋建て建物
- ② 1969年11月～81年5月、BDNビル
- ③ 1981年5月～91年 ANTARAビル
- ④ 1991年～2004年 LANDMARKビルB棟
- ⑤ 2004年～08年 BCDビル
- ⑥ 2008年～ Standard Charteredビル（JI Stario）



① 旧ジャカルタシアター



② BDNビル



③ ANTARAビル



④ LANDMARKビル

1971年のJI. タムリン BDN 屋上から



⑤ BCDビル



⑥ S. Charteredビル

ホテルインドネシア界隈：2018年4月



Nusantara Bldgからの眺望（JIホテル前の噴水）Apr17' 18

次回は東京五輪の余韻漂う2020年晩秋頃とし、現役の方々の参加を期待して、土曜日一泊日曜解散、会場は同様の浜名湖か、あるいは「つま恋リゾート（掛川市）」で思案中。それまで、皆さんお元気で！

ニチメン宝町会の紹介と2018年第14回ニチメン宝町会のご案内

川 本 寿 彦

「ニチメン宝町会」は、ニチメン事務総轄本部を母体に2005年（平成17年）に発足し、現在に至っております。

ニチメン京橋ビル2Fにありました計数部、事務総轄本部（事務効率化推進部、情報システム部、通信部、事務用品管理部、大阪情報システム部）、経理本部、営業会計部にご関係のありました方々、システムを利用されていたユーザの方々が、老若男女、年齢に関係なく参加され、交流を深め、安らぎ憩いの場になっています。

宝町に会社があったことから、「ニチメン宝町会」という名前になりました。

毎年11月の第2土曜日、IVY HALLで開催し、本年度で14回目を迎える事になります。

毎年、約30名の方々がご参加されています。昨年度の集合写真をご覧になって下さい。

「継続は力なり」と言いますが、ここまで続けられて来られた事に感謝しながら、続けています。懐かしい方々との再会、新たな出会いの場に如何でしょうか。

2018年第14回ニチメン宝町会のご案内

- ・ 日 時：2018年11月10日（土曜日）11：30～14：00
 - 11：00～ 受付
 - 11：30～ 集合写真撮影
 - 11：40～ 開会、懇親会開始
- ・ 場 所：アイビーホール 3階宴会場 ‘シノノメ’
 - TEL：03-3409-8181
 - <https://www.ivyhall.jp/access/>
 - 地下鉄：銀座線・半蔵門線・千代田線 表参道駅下車
(B3出口より徒歩5分)
- ・ 会 費：男性：7,000円、女性：6,000円

<世話人>

代表世話人	秀真 正彦		
顧 問	久武 雅志		
世 話 人	池側 保	世 話 人	近藤 厚子
世 話 人	川本 寿彦	世 話 人	田中 香織
世 話 人	上林 正嗣	世 話 人	舟木 路子

昨年の第13回ニチメン宝町会の集合写真



最後列左から、大羽、吉川、高橋、山本
三列目左から、星野、白石、勝井、荒井、近藤、舟木
二列目左から、数森、浅利、伊藤、野田、池側、森、上林、新藤、中田、川本
前列左から、三浦、久武、田尻、松本、秀真、名島、田中、岩淵、榊山、金井



一木会開催報告

奥村 睦夫

木材本部及び本部関連会社のOB会である「一木会」を年3回（1月、5月、9月）のペースで開催。

1983年から連続10年間、四大外材（米材、南洋材、北洋材、ニュージーランド材）原木輸入量で業界ナンバーワンであったことから「木材で一番」⇒「一木会」と命名され、開催月の第一木曜日に集合するようになり、今に至っております。

会則無し、会費無し、会長・役員など無し、各自自由参加で気楽に集まり、ランチ+ちょっと一杯を楽しみ、無事を確認し、昔の思い出を語り、年配者ならではの身体の不具合状況交換いい医者情報、欠席の方々の近況報告交換など、御齡と酒量のアンバランスにやや疑問を感じながらも、毎回閉会時刻を延長するほどの大盛会になっております。

本年(平成30年)の開催は、1月11日(木)、5月10日(木)、於、新橋駅前「味里=みさと」次回、次々回は9月6日(木)、2019年1月10日(木)、いずれも「味里」で開催。

↓↓ 1月11日(木)開催の新年会



一木会 新年会
2018/01/11

出席者：山口一光 白石哲也 鎗木順治郎 小田有久 武田尚憲 大山弘雄
 (順不同) 小島紀彦 杉野智彦 大久保海生 吉野昭一 青井勝 青木浩 曾我宏司
 鎌倉幸一 今井明 太田昌秀 松尾憲一 谷口雅美 奥村睦夫 ・ ・ 19名

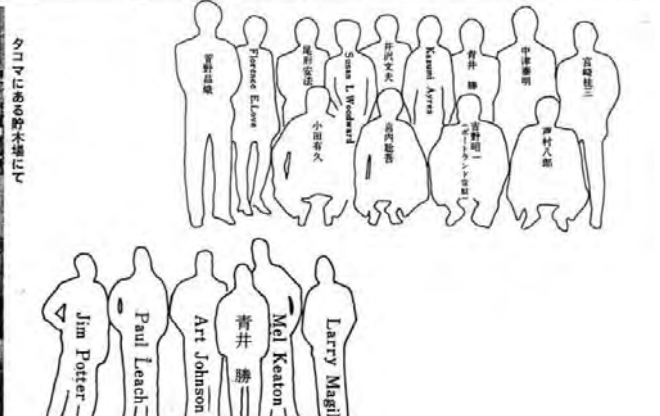
↓↓ 5月10日(木) 開催

出席者：山口一光 杉野智彦 鏑木順治郎 青井勝 武田尚憲 小島紀彦
大久保海生 菅野昌熾 青木浩 高尾勝 白石哲也 曾我宏司
鎌倉幸一 五十川暉夫(名古屋より) 奥村睦夫 ……15名

注) 今回の集合写真はありません(幹事が撮影を忘れてました)

.....

アーカイブス：今回は1973年シアトル店スタッフ



*この写真から45年経過、丸の内、八重洲 京橋界限は大きく様変わり。

第24回ニチメン食料OB会報告

小 野 宗 一

1992年4月に発足した食料OB会も24回目を数え、2018年は4月14日（土）一ツ橋の如水会館「ジュピター」において31名が集っての開催になりました。

1年半に1回の開催でスタートしましたが平成13年より毎年4月の第二土曜日の開催になりました。唯一平成23年の4月開催は東日本大震災の影響で11月に延期しています。

当初は米麦、飼料担当の穀物部中心のメンバーだったので「食糧OB会」としていましたがメンバーの対象を広く食品、畜産、水産部門にも広げようと「食料OB会」に変更し、今に至っています。

現在、年会費はなしで世話人を複数名選任し、共同代表に池田照幸さん（昭37）、佐藤武宣さん（昭41）のお二人、世話人メンバーに松田實さん（昭29）、坂本晤さん（昭32）、庭野松三さん（昭35）、倉持次雄さん（昭36）、松沢幸雄さん（昭37）、そして事務局に、橋本昌二さん（昭55）、紅林哲夫さん（昭49）、湯本章人さん（昭48）、筆者の小野宗一（昭47）が名を連ねています。当会が長く継続しているのは、立ち上げから会を引っ張り、盛り上げていただいた蜷川親秀さん（2012年に逝去）のお蔭と感謝しております。

第24回の今回は代表世話人の佐藤武宣さんが自ら会長を務める稲門艇友会（早大ボート部OB会）が翌週に控えた早慶レガッタの前哨戦と重なり残念ながら欠席となりました。

乾杯の音頭は世話人の倉持さんをお願いし、懇親会に入りました。それぞれ懇親の輪が広がり昔話、近況に話が弾みました。会半ば、現役代表として4月に双日株式会社の食料・アグリビジネス本部長に就任された宮部敏明さんに自身の略歴と双日のとりわけ食料部門の現況についてお話をいただきました。OBスピーチのスタートとしてニチメンゴルフ仲間で作っている笠間会会長の石原靖造さん（昭32）からお歳を感じさせない近況報告をいただき、次いで今回初参加で蜂蜜の輸入販売を行っている湯本章人さんから現在の仕事を中心に報告をいただきました。その後も今回初参加で参加者中最若手の千葉県印西市で農業を始めた田丸忠さん（昭60）、現在ヤマザキビスケットに勤務の和田匡さん（昭56）、今回2回目の参加となるSTIフードホールディングスに勤務の柳澤重英さん（昭54）、そして夫婦で参加された佐藤照子さん（佐藤悦三さん奥様）に次々にスピーチをお願いしましたが、突然の指名に驚きながらも皆さんから懐かしい思い出話や近況報告をいただき大いに盛り上がりました。会の最後に櫻井征夫さん（昭37）から挨拶をしていただき、3本締めでお開きとしました。午前11時30分開場、午後2時閉会でしたが2時間半が短く感じられるほど、思い出話や互いの近況報告、世代ごとの情報交換などの会話に花が咲き、またスピーチも充実したものとなりました。

年々参加者の平均年齢が上がってきていましたが、今回は若い方々の出席が増えて盛会となりました。若手の参加を今後もお待ちしております。また女性の参加が最近少なくなっていますので、お誘いあわせの上、参加くださるようお願い致します。

一以下、出席者名簿です（男女別アイウエオ順、敬称略）

池田照幸	石原靖造	伊藤尚志	入野英次	太田恵司	岡部健太郎	奥本卓也	小野宗一
笠井公雄	倉持次雄	紅林哲夫	小平実	櫻井征夫	佐渡隆	佐藤悦三	佐藤三朗
大久原親	高瀬允宏	田丸忠	千治松謙二	土橋勇	橋本昌二	服部忠雄	松田實
柳澤重英	湯本章人	吉川敏朗	和田匡	（男性28名）			
櫻井妙子	佐藤照子	（女性2名）					

現役招待者：宮部敏明 双日株式会社 食料・アグリビジネス本部長

来年度第25回食料OB会の予定：

日時：2019年4月13日（土） 11：30開場 12：00開宴 14：00閉宴

場所：如水会館（千代田区一ツ橋）、1階 レストラン「ジュピター」

ニチメン入社60周年記念・東西合同33会・有志の会

長谷川 洋



後列左から：松尾哲雄、高橋 正、白水 汎、大場禎治、永田洋一、菊沢 淳、橋本英雄。
前列左から：長谷川洋、大谷毅丈夫、鎌田亮三、田淵弘通、阿賀信夫、松田邦夫。

本年5月30日、横浜中華街ROSE HOTEL（重慶飯店新館）にて掲題の33会有志が参集した。関西組は、遠路遥々の参加でまことにお疲れ様でした。

何人かは新横浜駅で、松田邦夫さんが、お出迎えし、ホテルまでご案内した。

ロビーで待つ我々の前には、次々懐かしい面々が到着した。

まあ、お互いに生きていて今日の日を迎えられて良かったなあとの感慨を抱く。

我らは1958年（昭和33年）4月1日、日綿実業(株)中之島本社会議室で、新入社員として入社式に臨んだ。入社式では、堀之内敬さんが代表で挨拶したこと、60年経っても覚えている。“粉骨碎身、会社のために云々・・・”。その意気や真に壮たるものがあった。

昭和33年といえば、東京タワーが完成、一万円札の発行、日本が国連の非常任理事国に、そして、読売ジャイアンツの長嶋茂雄が、デビュー戦で、四連続三振した年だ。

さて33会、晚餐会は、中華街でも四川料理で有名な重慶飯店で。この店は、故安藤副社長、故野村副社長、故岩田昭二さんを含む“ニチメン湘南グルメ会”で来た店だ。

冒頭、大谷毅丈夫さんから、ご挨拶と乾杯。大谷さんはもう20年近く33会有志の会（宝塚独身寮仲間が中心での会合）の幹事役だった。

各テーブルでの思い出話は、やはりニチメン時代の世界を駆け抜けた商社マンとしての“喜びも悲しみも幾年月”の話が中心だった。

ニューヨーク、ロンドンに合計十年余の田淵さん、松尾さんの話が出たかと思うと、アフリカはスーダン、ナイジェリア、そして、旧ユーゴスラビアの大谷さん、バイルートの松田さん、等々、話題は尽きなかった。

昭和30年代、我ら33年組の駐在国を地球儀にピンで刺していくと、地球を一周したものだ。

MCは、不肖長谷川が担当し、紹興酒で快い酔いがまわったころ、参加者全員から近況報告。以下まとめる。(発言順)

- ① 阿賀信夫：今は、陶芸、麻雀、将棋などを楽しむが、今まで18年にわたり老人ホームなどを訪問し、マジックを250回以上実演してきたそうだ。当日もマジックの実演あり。
- ② 菊沢 淳：菊沢の囲碁は有名だ。今は週三回は、老人会で教えているそうだ。最近自動車の免許証更改で、“認知症テスト”で、98点の高得点でNo problem.
- ③ 鎌田亮三：8年前の脳梗塞、その後も再発し、今は7：00PM就寝、4：30AM起床とか。
- ④ 高橋 正：神林部長時代の棉花部に入社早々に配属。かなり早く、カラチ駐在で出たが、強烈なカレーにやられたか、身体を壊して帰国。その後、新潟の実家が全焼になり、商家を再興のため早期退社し、新潟に戻る。棉花部のお嬢さんを嫁さんに連れて行った。
- ⑤ 橋本英雄：十年前に、心筋梗塞になったそうだ。彼は、東京のMini-33会にも出かけてくる。
- ⑥ 大場禎治：仲間が一番元気がある。前は、松尾さん、故埴生さんの高尾山登山に案内役で付き合った。今回も、東京見物（寅さんの柴又博物館などの見学）に随行した。
- ⑦ 永田洋一：元建設部の永田さん、すっかり爺さんになって、ぱっと見て直ぐに分からなかった。元々温厚な紳士だった。懐かしい話をした。同期の増山のSAABの車で、故江口健一郎、永田、長谷川は一緒にゴルフに行ったこと。今は週に2~3回の囲碁を楽しむ由。
- ⑧ 白水 汎：元ニチメンTK野球部、今は宝塚逆瀬川に住む。ゴルフ、麻雀、ウォーキングを楽しむ。昔々の湘南ボーイだったとか。
- ⑨ 松田邦夫：ご子息家族と同居のため、3年前に関西から横浜市に住む。同居してお孫さんたちとの話す“若者ことば”が分からず悩むとか。趣味としての英語同好会、サークル活動に三つも入っていると。今回、横浜観光ガイドを引き受けた。
- ⑩ 田淵弘通：2012年の東京での33会に参加して、スカイツリーなど観に行ったが、その帰りに腰に激痛が走り、快癒まで大変だった。最近も、家の近くで、転倒し、顔面損傷、骨折したそうだ。今までに3回も転倒したそうだ。大阪社友会・初代会長の田淵さんお大事に。最近、中世ヨーロッパなどの歴史小説を学んでいる由。大旅行も年2回は出かけるとか。
- ⑪ 松尾哲雄：名前の通り、鉄の男で、病気をものともせず、飛び回っている。PC同好会、カメラ同好会、ウォーキング、ゴルフetc. 2017年度ゴルフコンペの成績：優勝、優勝、三位、四位。。。とか。関西33会の世話役。
- ⑫ 大谷毅丈夫：TKミニ33会の世話役。最近、下半身が痺れて大変なのに滅私奉公。太極拳の会・会長、古代史、囲碁と多彩な活動も最近、古代史のみ。文武両道の彦根東高出身。田原総一郎と同級。。
- ⑬ 長谷川洋：今回は計らずも、お世話役。そういえば、東京社友会世話人も十年余もお勤めし、昨年末、退任。会報の編集人も20号まで、頑張った。いい思い出。相変わらず、高校の同窓会関東支部、横浜時事英語クラブに関わっている。人と会って、談論風発、懐旧談など、老後の生活の脳の栄養だと思っている。

今回が最後の33会などと言っていたが、誰ともなく、又会おう、となって次回は、2020年に京都かどこかで会うことになった。“LONG LIVE, 33会！”

俳句の会「いろは句会」

宇治田 薫

会員にとり貴重な心の糧となっている「いろは句会」は本年1月、お陰で発足来30年を迎えました。入会ご希望の方はご遠慮なく会員にお申し出願います。

前号会報以降の会員の作品を以下の通り、ご披露致します。(50音順)

荏苒と鈍なる老いの日短
筆筈の寿ぐ音色日脚伸ぶ
細枝とて零れず確と積もる雪

宇治田薫風

朝雲の変幻自在冬の空
春光の水面を走る風の音
二つ三つ大地にしかと露の臺

久保田悦子

鈍色の雲の切れ間に冬の影
旅立ちの母が向かふは冬の空
温度差に桜の蕾二度寝かな

佐藤 英二

おお寒とムククの叫び我の顔
春光や大道芸に立ち止まる
芽柳に屋台広ぐる池ほとり

下川 泰子

湯豆腐やぐらりと揺れて先づ一献
日脚伸ぶ犬の歩みの軽やかに
かぐはしき香り肴に梅見酒

田中 秀明

池の辺に昼餉を囲む小春かな
背戸口の敲かるる音余寒あり
春の雷荒ぶる風の止みて直ぐ

藤野 徳子

わだかまり糊に溶かして障子貼る
それぞれの初恋語る焚火かな
凍鶴の声矢となりて天を射る

堀部 暁



ニチメン・シカゴ会

保 科 孝

5月26日（土）、東京青山の青学会館で、第6回ニチメン・シカゴ会が開催されました。

今回は86名の方にご案内、海外、関西など遠方よりのご参加6名含めて最終30名出席の会となりました。その様子を当日の写真を含めて以下ご報告致します。

会は12時から藤井敬三さんの司会進行で、初めにこの一年の間の物故者、杉本佳久さん、朝倉重道さん、三瓶武昭さんに対する黙祷が行われご逝去を悼みました。次に発起人代表として三分一克美さんのシカゴ支店創設時のご苦勞話を交えてのご挨拶、田中長典さんの発声により、今回実現したご夫人参加の歓迎と全員の健康を祈念しての乾杯と続きました。ご夫人の参加で、まさに華やぎの加わった会のスタートでした。

しばし歓談の時間をはさみスピーチコーナー、参加者の最長老、創業時の亀田昭さん、関西宝塚からご参加の渡邊康さん、関西から今回ご参加が叶わなかった最長老、辻井準一さんのメッセージを携えての吉本邦晴さん、マレーシア・ペナンから一時帰国で駆けつけられた小幡和徳さん、とそれぞれにスピーチを頂きました。

次の御夫妻参加者4組の登壇はメインイベントの感で、御夫妻皆さんから一言スピーチをいただきました。25年～45年前の初めてのシカゴ駐在当時のご夫人同士子育てでの助け合い、また駐在ならではの家族ぐるみのお付き合いの懐かしい再会の感激など、それぞれが大変心温まるスピーチで、また永田堅志郎さんのこの場を借りての奥様への感謝の表明のハプニング・スピーチなど、出席者皆大変温かい気持ちに包まれたものと思います。

それに触発されての、特別ゲストのフォスター電機の川村史郎さんの志願のスピーチでシカゴ支店への謝辞などを頂きました。

その様な具合で、司会の藤井さんが予定より少し早めに開始したスピーチコーナーは、予定を大幅に超過しましたが、大変楽しく大いに盛り上がったものとなりました。

その後短い歓談のあと、米田信一さんの中締め、小幡さんを指名しての一本締めがあり、

五月女さんの総括と次回来年5月25日開催のご案内、若手世話人全員の登壇で次回はより多くのご夫人同伴で行いましょうとの締めとなりました。

シカゴ会のメンバーは若手が多くまだ現役として多方面で活躍中です。還暦前後での駐在、出張他の予定などと重なるなどで出席が叶わない人も多い中、今回も出席の約三分の二が戦後生まれで、高齢者のOB会には見られない活力と元氣を得られる会とも言われております。

今年はそこにパートナーよりもより活力に満ちた？ ご夫人のご参加を頂き、更に活力と華やぎのある会となりました。御夫妻で参加いただきました、五月女御夫妻、永田御夫妻、安井御夫妻、藤井御夫妻に紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。そして次回も大いに活力と華やぎのある会にできればと願っております。

シカゴ会はシカゴ駐在のみならず、メーカーの方でニチメン・シカゴに駐在されていた方、また第3回の会からシカゴ支店にゆかりのある方にも広くお声掛けして参加頂いています。次

回は第7回となりますが、場所は今回同様以下での開催となります。

シカゴの駐在員のみならず、ゆかりのある方は是非奥様同伴でご参加下さい。

第7回ニチメン・シカゴ会

日時：2019年5月25日（土曜日）11時半集合、12時開演

場所：東京青山 青学会館 3Fアロン

シカゴ会連絡先：保科孝（oshina_t@ab.cyberhome.ne.jp）

携帯：090-9059-0043



藤井夫人、藤井敬三、永田夫人、永田堅志郎、五月女夫人、五月女穰、安井夫人、安井修司





後列：藤井敬三、平嶋成晃、藤久保俊三

前列：影山 雄司、浦野由紀夫、池永 浩、亀田昭、金井湧二、浅利真司、保科孝



後列：鈴木淳一、山内直之、北野廣道、浅利真司、渡辺康、牧浦弘幸、安井修司、小幡和徳

前列：五月女穰、川村史郎、田中長典、岩村久雄、三分一克美、吉本 邦晴、米田信一、藤井敬三

会員寄稿文

天才詩人・ゲーテ探索
……80歳にして「ファウスト」を読む……

竹 内 可 能

会社をリタイアしたとき、それまで心に描いてきたわが余生の楽しみの一は云うまでもなく読書だった。真っ先に頭に浮かんだのはダンテの「神曲」とゲーテの「ファウスト」だがそれにはわけがあった。この二作はいずれも在職中に何度か手がけたことはあったのだが、そのたびに途中で読み止しのまま放置してきたのは中味が難解で面白くなかったからである。

今年傘寿を迎えたある日、ふとした読み物のなかにゲーテの記事がわたしの目にとまった。それによると彼が亡くなったのは82歳のときとあり、なんとあのファウストの第二部を書上げたのは亡くなる前年のことだったという。ならば今年80歳になったわたしでも、今にして読んで分かるのではないかと思ひ直し、やにわにまた読みはじめようとした次第であった。

もともと「ファウスト」第一部はゲーテ初恋の人グレートヒェンに囚んだ悲恋（悲劇）の物語である。読んでとびきり面白いのは額面通りだが、全体から見れば五幕物の第二部に対しての序幕ともいえる。やはり問題は第二部の方である。

こんな日のこともあろうかと、わたしはこれまでも「フランス革命」だけは詳しく歴史をひもといてきたつもりだったし、ドイツの歴史については「神聖ローマ帝国」のこともひととおりに学んできた。とりわけ「ハプスブルク家」のことは注意深く読んできた自負もあった。この程度の歴史的な背景が頭のなかにありさえすれば「ファウスト」第二部も理解できるはずだと考えたからであった。というのもその前にダンテの「神曲」なら何とか読み終えることができたのは、わたしの好きな皇帝フリードリヒ二世を読み込んでゆくうち、13世紀のイタリア半島という両者共通の時代背景がのみ

こめたとき、ダンテが「神曲」で言いたいことがこつ然と理解できたように思えたからである。

ところが今度はそうは問屋がおろさなかったのである。こんどまた「ファウスト」を読むうち、第一部はよいとしても第二部にさしかかった途端にまたわけがわからなくなる。一時はこんな難解なものは金輪際やめにしようかとも思ったが、そこはいまさら時間がないわけではないし思い直すことにした。

思えばゲーテがファウストの第一部を刊行したのが1808年、ときに彼は59歳であった。その彼が第二部を書上げたのが82歳のときだったというから、それ以来およそ23年の間ゲーテは死ぬ間際まで、ファウストをテーマとして心にあたためつづけていたことになる。因みに彼は20代半ばに「原ファウスト」と呼ばれる作品に手をそめており、更には41歳のとき「ファウスト断章」という文章を発表しているという。

これらのことを勘案すれば「ファウスト」こそは、天才詩人ゲーテ80年の畢生をかけた大遺作品であることが知れる。一読者がこれを難解だからというだけの理由で読まずして一生を終えらしたならば、生涯の損と知らねばなるまい。そう決心したのだった。とはいえ今度はこの書の難解に対処するため一工夫こらすことにした。第二部にさしかかったところで、これを一旦読み止しのまま棚上げとし、かわりにゲーテ自身による有名な自伝「詩と真実」と、助手のエッカーマンに書かせた「ゲーテとの対話」を先行して読むことにしたのである。

この大詩人が「ファウスト」で描こうとした生涯の体験（小宇宙の）や思想（大宇宙の）を理解するには、彼が全篇に駆使する寓意（アレゴリー）や暗喩（メタファー）

に依るだけでは一層無理がある。とりわけゲーテ独特の大宇宙の哲学などの理解には「詩」をもってするよりは、彼自身の原体験としての「真実」を知る方が手っ取り早いことに気がついたというわけであった。

この決断はわれながらなかなか有効であった。

ゲーテという男は文字通り天才的な詩人であり文学者であることは天下周知だが、音楽や美術・絵画といった分野での造詣もただものではない。また自然科学者（色彩学をはじめとして鉱物学、動・植物学、解剖学や医学など）としての活躍にも目覚ましいものあり、さらには御当地ワイマールでは宰相まで務め上げたれっきとした政治家・法律家でもあった。要するに当時の言葉でいうならば「大宇宙的」なマルチ天才型マルチ人間とでも言おうか。

それだけではない。彼のもう一面の特徴はといえば哲学と宗教にめっぽう強い興味と関心を示していたことであった。彼が青年期からスピノザの汎神論的な哲学にぞっこん魅了されていたことはつとに有名だし、ドイツ観念論的な哲学には拒否反応を示していたものの哲学者カントだけには敬意の念を持していたことなどが知られている。因みに同時代を生きた哲学者ヘーゲルとは面談したこともあり文通もあったが、この大御所の哲学が説く時代精神とか絶対精神というものを嫌っていたことは、「ファウスト」の文中にもそれとなく出てくる。ゲーテはヘーゲル哲学のなかにキリスト教の理念が入り込んできていることに違和感を覚えていたきらいがある。

彼の宗教観をひとことで言うとしたら、自然と神は同一であるというに尽きようか。むろんキリスト教徒ではあったものの、ときには異端視されることもあったのはそのためであり、また錬金術のような神秘主義を好んだためともいわれる。

ゲーテの「詩と真実」はルソーの「告白」と並んで、今も自伝物としては世界の最高傑作といわれているらしい。それはさておき、彼がこの自伝とエッカーマンに書かせた「ゲーテとの対話」、それに「ファウス

ト」を加えた三作品は、最晩年のゲーテが自分の確かな遺志（正式な遺書は別途書き残している）として世に問うたものであろう。今風に言えばゲーテらしい几帳面な“終活”とでもいうべきものの結果であったといえよう。

それだけに、わたしが「ファウスト」を理解するのにこれらを三部作のようにして同時に読むことができたことは僥倖といえた。私にとってゲーテ独特の寓意と暗喩につつまこまれた大宇宙論の探索には、彼の戯曲だけではなく原体験としての「真実」が必要だったからである。

しかし小宇宙にしても大宇宙にしても彼の哲学や思想を解明することが今のわたしの本意ではない。それよりは「ファウスト」でこの歳になるまでわたしを悩ました主要な原因と思われる錬金術（Alchemy）について、下記に思うところを書き残してこの書を読み終えた縁としたいのである。

錬金術についていえばまずファウストの名前だが、これは15・6世紀頃の中世ヨーロッパに実在した著名な錬金術師（Alchemist）のことで、ゲーテが幼少のころから感激し興奮して止まなかったとされる伝説上の魁偉である。先述のように彼は59歳のとき「ファウスト」第一部を書上げたが、このときこの大作の題名に件の錬金術師ファウストの名前を冠することに、ゲーテはなんの躊躇もなかったろう。それほどまでに幼少時代からのファウストへ思い入れは晩年に向かうほどに募り、ついには病膏肓となり戯曲「ファウスト」の端緒となったものと思われる。

もともと錬金術は古代エジプトに起こり、アラビアを経由してヨーロッパに伝わった原始的な化学技術のこととされる。それが中世ヨーロッパを風靡したのは、究極の目的が化学的に“金”を合成するという古来人間の夢がかかっていたからであろう。しかし事実はそれだけではない。その頃の中世ヨーロッパにあっては、現代では信じがたいことだが、科学（science）そのものは学問の代表格だった哲学（philosophy）の

一部門とみなされていたのだ。こうした時代背景のもとでは、科学（化学）としての錬金術もまた哲学の範疇に属していたのは当然であった。

とはいえ中世から近代にかけての西洋哲学は宗教哲学同然とあってよく、また宗教そのものも純粋なものからまやかしに至るまで混然としていた。従い錬金術自体も純粋な化学技術とは言い難く、占星術やら各種の魔術と見境のつかない雑多な宇宙哲学の様相を呈していたことは容易に想像される。このことが後代の大詩人ゲーテというマルチ天才型マルチ人間の好奇心をあやしく燃え立たせたのだろう。

彼が森羅万象（自然）をみる観察眼は科学者のものだったから、中世ヨーロッパの錬金術師たちが精魂打ちこんだAlchemyを化学技術として受け止める確かな目は持っていた。しかしその一方で彼らが繰り出した大宇宙の哲学なら、それが神秘的で魔術的であればあるほど、ありのままに理解し感激し興奮もした詩人の心もまた確かなことであつたらう。畢竟するにゲーテは終生の大遺作品「ファウスト」の中で、中世のAlchemistに寓意と暗喩を託し己の生涯の姿と思想をまるごと投影してみせたかったのだ。

中世ヨーロッパの錬金術が秘術をつくして挑戦した「賢者の石」、すなわち“金”や不老長寿薬の合成は結局実現することはなかった。その賢者が夢みた「人造人間」も夢のまた夢のままで潰えた。しかし詩人ゲーテはといえば、「ファウスト」第二部冒頭の第一幕「皇帝の城」の場面から、Alchemistファウストの錬金術を巧みな寓意に包みながらこの戯曲の難解な見せ場をつくりはじめる。なぜ皇帝でなければならないのか、それがなぜ大宇宙に因むというのか現代の読者の挫折がここに始まっている。

それはともかくとしてこの皇帝は宰相（実際は悪魔メフィストフェレスなのだが）の意見をいれてしゃにむに造幣量をふやすことで財政破綻を脱することに一旦は成功

する。紙幣増発の担保は地下に埋蔵されている無尽蔵と思われた“金”をもってするとされる。ここに見られる暗喩は、金の合成と紙幣の発行という奇妙な符号が想わせる後代の金本位制であろう。小公国とはいえワイマールという一領邦国家の宰相をつとめ、財政難も経験したはずの鉱物学者でもあったゲーテにとって、これは「ファウスト」を書き起こすことの原点だったことをうかがわせるに足る。

さて皇帝についてだが、「ファウスト」の訳者の脚注にはこれは「神聖ローマ帝国」の皇帝とある。そもそもこの帝国というのは、甚だけたいな歴史的遺構というべきで、実態は帝国はおろか国家の体をなしていなかったのである。ではなんだったのかと問われれば領邦国家群だったと答えるしかない。実際問題として神聖ローマ帝国は1806年、ゲーテがまだ活躍中のころ歴史を閉じる（崩壊する）のだが、それまでは大雑把に言えば三百有余の大小諸侯の領域国（都市や領邦）から成る連合体（合衆体とでもいおうか）であった。皇帝はハプスブルク家に代表されるように確かに存在はしてきたが、それはいくつかの諸侯の中の有力な者（選帝侯）によって選ばれてきた。しかし各諸侯の実権は極めて強大だったから、実際には皇帝はいても帝国は存在しないも同然というのが不思議な実体であった。ドイツ民族にとって神聖ローマ帝国というのは、古代ローマ帝国への限りない憧憬と、自らがその後裔たるべしとの祈りにも似た願望とが生んだ、一種まぼろしの「帝国のかたち」だったように思える。

大哲学者カントが生涯にわたり生誕地のケーニヒスベルクの要塞から一步も外に出たことがないという逸話は有名だが、それはまたドイツ統一以前の市民による「小宇宙と大宇宙」という概念を説明して妙なるものがある。カントよろしく小宇宙というのは自分が住む都市であり領邦内のことだが、その要塞なり境界を一步でも越えたところは天空を含めて大宇宙を意味したのだ。同様にして中世ヨーロッパの錬金術が展開する哲学は、常に大小の宇宙とその間の関係

論を論じ立てていたように見受けられる。ゲーテの「ファウスト」もその例にならって第一部は小宇宙、第二部は大宇宙というわけである。厳しい社会的閉鎖状態が生んだ観念論的な現象といえようか。さらには小公国ワイマールの一市民としてのゲーテにとっても、神聖ローマ帝国であれその皇帝であれ、Alchemyが指し示す大宇宙のことを意味したことが知れる。

以上が難解な「ファウスト」第二部の冒頭で出くわした「皇帝」を切り口として、挑戦者のわたしが試みた後知恵入りの解説である。戯曲はこのあとも Alchemist に寓意を託しながらえんえんとつづくが、わたしの読解はこのへんでとどめ置く。その代り以下に「ファウスト」の読後感をしたためて脱稿することとしたい。この書が難解であることは再三ふれてきたが、今改めて考えてみたいからである

第一に言うまでもないことだがわれわれ現代人にとっては、たださえ難解なヨーロッパ中世の錬金術が、それも寓意と暗喩に用いられている戯曲の仕掛けに求められよう。それに天才詩人ゲーテが得意とするドイツ語による脚韻を踏む詩形は、ドイツ語を理解しない外国人にとって不利はまぬがれない。日本語の俳句や短歌の短詩型が外国人には困難を伴うに似ている。

第二には作家がゲーテという稀代のマルチ天才型人間の、空想・哲学・宗教・科学の一切を包含して宇宙にひろがる好奇心と探究心は、時代を超えて常人の追隨をゆるさない。

第三にゲーテの時代とも、疾風怒涛(シュトルム・ウント・ドラング)の時代ともいわれた18世紀末から19世紀初頭の、世界史的にも特殊なドイツの時代環境を措いて「ファウスト」を語ることはできない。ゲーテが目当たりしてきたフランス革命からナポレオンの興亡(彼はゲーテに面会したことがある)、そして反革命。それら文字通りの疾風怒涛がゲーテを直撃したことは事実だが、その真只中にありながら「ゲーテの時代」といわれたこの時期ドイツの奇

妙な教養文化的平穩に注目しなければならないだろう。

先述の神聖ローマ帝国の実体だった当時の領邦国家群のことを思い浮かべてみよう。ゲーテが住み込んだワイマール公国も例外ではないが、数多くひしめいていた侯国(領邦)はそのいずれもが専制君主の支配下にあった。ところがこれら専制君主(王)たちの権力に最も密接な関係にあったのが、なんと官僚・法曹・学者・芸術家など当時新興の知識(教養)階層だったといわれる。ゲーテはまさにこの知識階級の代表のようにして、領邦国家群の中を大宇宙的に破格の学術的、文化的(芸術的)な自由を享受していたのである。

最後にゲーテの自伝「詩と真実」を読んだから、わたしの脳裏を離れがたく思えるハプスブルク家の皇帝ヨーゼフ二世のことにふれておきたい。ゲーテ年の頃15,6歳の少年時代かと思われるが、この皇帝の戴冠式がゲーテの生地フランクフルトで催されたときのことだ。彼はこの書の中で目を剝くような豪華絢爛たる式次第の様子に興奮し、市内の行事行列を飛び跳ね追いかけまわす少年ゲーテの姿を見事なまでに描写している。

「ファウスト」の中で皇帝というとき、ゲーテの頭にはまずヨーゼフ二世のことが浮かんだことだろう。それにこれを読んだ当時のドイツ人なら(領邦国家といえどもドイツ人としての国民意識はあったらしい)、皇帝と聞けばそれはヨーゼフ二世ならずとも、その母マリア・テレジアか、妹のマリー・アントワネット(ルイ16世の妃)ぐらいは想起したに違いない。落日の神聖ローマ帝国をしのぶ懐旧の念は共通のものだったはずだから。

われわれ現代の日本人読者が「ファウスト」の皇帝の城の中で、その行間にこのような皇帝に対する感懐をドイツ人と共有できることは望むべくもない。時空はあまりに遠い彼方である。そのこともわれわれに今「ファウスト」を限りなく困難なものとしていくように思われる。

会員寄稿文

一世の人たちのこと

吉 川 浩

私は67年から72年までサンフランシスコ支店に勤務しましたがその頃は一世の人たちがご健在で日本町の食堂に“テーキアウト出来ます”とか“来週のピクニックはレーキアローヘッドに集合”などの張り紙がよくありました。

Take out、Lake Arrowheadのことですが極めつきは“来月のゴルフはマサカキャニオンにて開催”という張り紙でこれは私達もよく利用したMassacre canyon golf courseのことです。一世の方達は英語に苦勞されたはずですが耳から覚えた英語というのはすぐに通用する英語だと思いました。

ある日サンフランシスコクロニクルの一面に“SHUSIN”という大きな見出しの記事が載ったことも思い出します。その年はハワイ開国100周年にあたりハワイではいろいろな記念行事があったのですが時の州知事はGeorge Ariyoshi氏、二人の上院議員はSparks Matunaga、Daniel Inoue両氏、その他公務員、医者、教師などに多くの日系人がいました。

100年前に東南アジア、中南米などから同時に入植したのに何故社会的地位が高い仕事に日系人が多いのかクロニクルの記者が興味を持ってハワイの一世の人達を尋ね歩いたところ異口同音に自分たちは小学校の修身の授業でいくら貧しく、いくら苦勞しても子供にきっちりと教育を受けさせるのが親の務めであると教わったがそれを忘れずに実践したという答えが返って来たという内容の記事でした。言うは易く行うは難し、修身で習ったことを実践された一世の人たちの話に感動したのを思い出します。

尚、Daniel Inoue氏は第二次世界大戦中欧州戦線の二世部隊で活躍され片腕を失くされたが長年上院議員として活動されたことは皆様ご存じのことです。先年亡くなられましたが同氏の功績を称えHonolulu airportをDaniel Inoue airportと呼ぶことになったと先日報道されました。JFK airport同様Inoue氏の名前が将来に長く残るのは誠に喜ばしいことです。

二世部隊で思い出しましたが太平洋戦争が勃発すると西海岸の日系人は敵国人であるという理由で砂漠地帯にあるキャンプに強制収容されました。そのキャンプでの生活を写真に残した人がいてその写真展を見たことがあります。カメラの持ち込みは許可されていなかったのでロスで写真館をやっていた人が箱に孔をあけてレンズなどあり合わせの部品をつけて作った一眼レフで撮ったものでピントや絞りなど十分でない写真でしたがそれだけに収容所の雰囲気がよく出ていました。私が一番ショックを受け、感銘を受けた一枚は欧州戦線で戦死した息子さんの両親に軍の偉い人が賞状を渡している写真でした。

息子がお国のために戦死したのに両親は強制収容所で賞状を受け取る、こんなことがあっていいのかと思いました。日系人の強制収容についてはアメリカも反省し何年も経ってから正式に謝罪する決議が連邦議会で可決されましたが人権の国アメリカでもこんなことがあったことを忘れてはいけないと思います。

会員寄稿文

「ミステリ小説断想」(7)

福 富 直 明

1. よく効く薬

生水を飲むと危ない国は結構多い。そういう国に派遣される駐在員には僻地手当を支給されるべきだったと思う。パキスタンの生水も危険で、社宅には煮沸した水が常備されていた。それでも数か月に一度は腹具合が悪くなる。まるで水の中に煮沸しても消えない微量の毒が残っていて、それが体内に蓄積されて数か月ごとにわるさをするような感じだった。そんなとき、繊維担当の村上さんがこの薬が実によく効くよと教えてくれたのが、茶色の錠剤のエンテロヴィオフォルムだった。確かに素晴らしい効きめで、2錠服用すればぴたりと治る。ペニシリンに並ぶ世紀の名薬だなと感心したものだ。

英国作家のエリック・アンブラー（1909-1998）の『武器の道』（“Passage of Arms” 1959）の中に観光旅行中のアメリカ人がシンガポールでインド料理屋に招待される。店の中を蠅が飛び回っているのを見て、ホテルに戻ったらエンテロヴィオフォルムを嘔まねばなるまいと考える場面がある。また、次作の『真昼の翳』（“The Light of Day” 1962）ではスイスからイスタンブールに来た男が、ここの飲み水安全かね、念のためにエンテロヴィオフォルムを沢山持ってきたよという。二作品に続けて同じ薬の名が出てくるのが、作者の体験に基づいているみたいでおかしかったし、時代設定もちょうど私がパキスタンにいた頃だ。

調べてみたら、この薬は travellers' best friend という別名があったほど、インドの Delhi belly とか メキシコ Montezuma's revenge といった水質の悪い土地で悩まされる症状に対する旅行者必携薬として有名だった。

ところが、日本では1970年にこの薬の製

造販売は禁止されている。1960年代後半にしびれ、腹痛、麻痺、視力障害、全身の機能障害などに苦しむ患者が急増し、当初は正体不明の伝染性のウイルスによる症状だと考えられて、スモン病（subacute myelo-optico-neuropathy の略称だそうです）と呼ばれた。まもなく、この症状がエンテロヴィオフォルムを過剰服用したときの副作用だと判明する。それまではこの薬は健康保険組合などから家庭常備薬として配布されていた。数か月に2錠なら問題ないが、大量服用を続けると、恐ろしい副作用のある薬品だった。

エンテロヴィオフォルムはキノホルムの商品名の一つである。日本に続いて、アメリカ、スウェーデン、ノルウェー、NZなどが使用を禁止したが、最近になってアルツハイマー病の特効薬として使える可能性が出てきたという。

こんな薬が小説の中で1960年前後の時代背景を語るヒントになっている面白い。ちなみに上記のエリック・アンブラーの二作品は絶版だが、もしも古本屋で見かけたら即座に購入し、ご一読なさることをお勧めする。楽しい読書になります。

2. 消された切手

アンブラーの初期の作品“Background to Danger”（1937）にルーマニアのファシストの Corneliu Codreanu（1899-1938）の名前がちらっと出てくる。ずば抜けたカリスマ性を持ち、1927年に反ユダヤ、反共の超国粹主義の極右組織の〈大天使ミカエル軍団〉を結成、その名が示すように極右組織にしては珍しく東方正教会の信者群だった。1930年に組織の中に〈鉄衛団〉（The Iron Guard）と呼ばれる民兵集団を作り、これが首相二人と内務大臣を暗殺している。

会員寄稿文

海外駐在員 勘違い英語傑作撰

芳 賀 信 明

海外駐在に出た時にはとんでもない英語の勘違いをしていることがあります。

私のはじめての海外赴任をしたのは1963年、28歳の時にマニラ駐在を命じられました。その時の前任者は宮崎孝さん。引継ぎの時に「これからアトネのところへ連れていくからな。」と言われて「アトネってなんですか。」と聞くと、「お前アトネも知らねえのか。アトネって言ったら弁護士の事じゃねえか。」「ああ、アターニーのことですか。」「そんな気取った英語じゃ、ここじゃ通用しねえよ。」一蹴されてしまいました。

当時、マニラでは阿多支店長の肝いりでニチメンと現地資本との合弁でSuper Industrial Corporationの工場建設が始まっていました。私は一般商売のほかに、ここに対する鋼管製造用Hoop(帯鋼)の納入を担当することになっていました。

あるとき、工場長のDumlaoと話しているときにシンクが欲しいと言われました。

内地から出発するときに鉄鋼本部からステンレスのシンクを売ってくれと頼まれていたので、念のため台所用の流し台のことかどうか確かめてみました。ところが違うというのです。メタルの塊だとうのです。シンクなんて金属は聞いたことがないので、あれこれ質問しましたが分かりません。最後に苦し紛れに「元素記号」で言ってくれ、というときCnだといひます。

さて、Cuなら銅だがCnっていったいなんだろう。最後に相手が鋼管を鍍金するのに使うのだというのでやっとわかりました。SinkじゃなくてZinc [亜鉛] です。元素記号はCnじゃなくてZnです。フィリピン訛りの英語ではザジズゼゾはサシスセソに

なってしまうのです。

たとえば人名のGonzalezはゴンサレス、数字のZeroはゼロです。

この時はシンクがジंकと分かるまでに結構時間を浪費してしまいました。

なお、このときのSuper Industrial Corporationは昭和48年からデンロコーポレーション(元日本電炉)の関連会社になったようです。(ネット調べ)

そんな風に始まった駐在員生活でしたが3年経って帰国する頃には、すっかりフィリピン訛りにも慣れました。

私の後任も日本から到着、私は先輩ぶって彼をナイトクラブに連れ出しました。

二人は別々のテーブルでホステスさん相手の飲んでおりましたが、彼が「芳賀さん、この中に中華料理屋ありますか。女の子が中華料理を食いたって言うのですよ。」はて、ナイトクラブに中華料理なんて似つかわしくありません。私が女性に直接話を聞いてみると

彼女たちは口ぐちにフライドチキンを注文してくれとねだっているのです。彼にその話を伝えると「そうか、ライチーケン、ライチーケンと言うので、てっきりライチーケンという中華料理屋があるのかと思った」、とのこと。フライドチキンをライチーケンと発音する彼女らのことばを来々軒みたいな中華料理屋と勘違いしたようです。

1972年38歳の時にはヒューストン駐在を命じられました。前任は福富さん。

ヒューストン到着の翌日、福富さんからイミグレーションオフィスに行って外国人登録をしてくるよう言われました。合同

庁舎はヒューストンオフィスからウオーキングディスタンスです。

早速、ビルに到着しましたが、どちらへ行ったらよいか分かりません。案内係らしい黒人にイミグレーションの場所を訊くと

Go down the hall to the right …..みたいなことを言われてホールを右へ行きました。Downというのだから階段でもあるのかと思ったら階段はありません。うろうろしていると、目の前がイミグレーションオフィスでした。英語にはあまり意味がないdownがあると知りました。

なお、当時ヒューストンの店はJapan Cotton Co.を名乗っておりましたが、コットンの発音がなかなか難しい。福富さんからは和裁の「カタン糸」のつもりでカタンと発音すれば通じやすいとご教示いただきました。

ただし、売り込み相手からは「何故、綿屋が鉄を売っているんだ。」と御馴染みの質問が帰ってきます。日本でも高炉メーカーに散々言われたセリフです。この話を商社仲間のKGの駐在員にしますと「Japan Cottonなら、まだいいですよ。KGの説明するのは大変ですよ。」と言われてしまいました。

何十年も前に、ある文芸雑誌の随筆欄に面白い話が載っていました。

ある会社の社長さんがアメリカへ出張。ビルのホールでエレベーターに乗ろうとすると、黒人のエレベーターボーイがにこやかに「旦那さん。」と言ったそうです。これは日本語が通じると思って「下へやってくれ。」と言うと下へ行ってくれました。

帰りに先ほどのエレベーターボーイとまた会ったら、やはり「旦那さん」という。今度は「上へやってくれ。」と言ったのに下へ降りてしまった。

あとで分かったのは、「旦那さん」じゃなくて、Down, sir. だったらしいということです。

ヒューストン着任直後に歯が痛くなって、

ダウントウンの歯医者さんへ行ったことがあります。一通り治療を終えると、中年の歯医者さんは「あそこにいるGirlにお金を払って帰っていいよ。」と言います。治療室を見まわしましたが、girlなんかいません。皺だらけの御婆さん看護婦が一人いるだけです。歯医者さんに「Girlってどこにいるんですか。」と聞くと、御婆さんを見やりながら「そこにいるじゃなか。」と言います。

看護婦さんには随分失礼なことになってしまいましたが、girlは別に「若い女性」だけではなくて、男性に対する女性の意味だと知りました。鉄のユーザーの工場を見学すると、案内してくれた人は女工さんのことをgirlsと説明してくれましたね。

これも、噂ではニチメン随一の英語達人(自称 right English speaker)という人から聞いた話ですが、赴任直後アメリカ人から夫婦で日曜日の飯に招待されたそうです。「なにを着ていったらよいか。」と聞いたら「サンデー・ベストを着てこい。」と言われたそうです。

夫婦そろって一生懸命チョッキ(ヴェスト)を買いそろえて着て行ったら、ほかの客はチョッキなんか着ていなかった。Bestとvestの聞き違いで、ヒアリングの悪いことまで暴露してしまいました。Sunday bestとは晴れ着のことです。ひょっとしたら彼の創作の話かもしれませんが……

最後に、内地から送り込まれた英語の研修生の話です。

私はヒューストンみたいに南部訛りのひどいところで、英語の研修するのは反対でしたが無理やりに内地から押し込まれてしまいました。

ところが、この研修生、"Japan as number 1" 思想にすっかりかぶれてしまって、アメリカの風物や商品に全く関心を示しません。このときは私も二度目のヒューストンで単身赴任を強いられていましたの

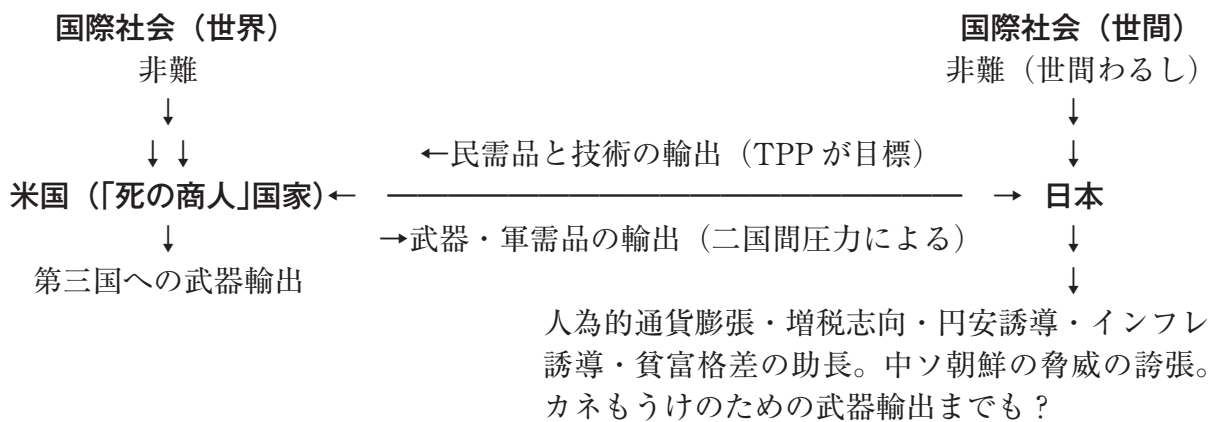
商社を含む日本企業内でも失われつつあるが、そのぶん国公立・私学を問わず日本の大学・高校がいろんな技能・文化や多角的視野をもつ人材の養成に力を入れていて、総合商社はこうした人材を自由に採用することができる。今までも学歴社会でないといわれてきた総合商社がより多学歴化するだろう。このような多彩な人材で構成され

る総合商社の活動はどうあるべきか。私の答えは図のとおりである。紙数がないので図だけを提示する。不正確な表現もあるが、図を見て考えていただきたい。

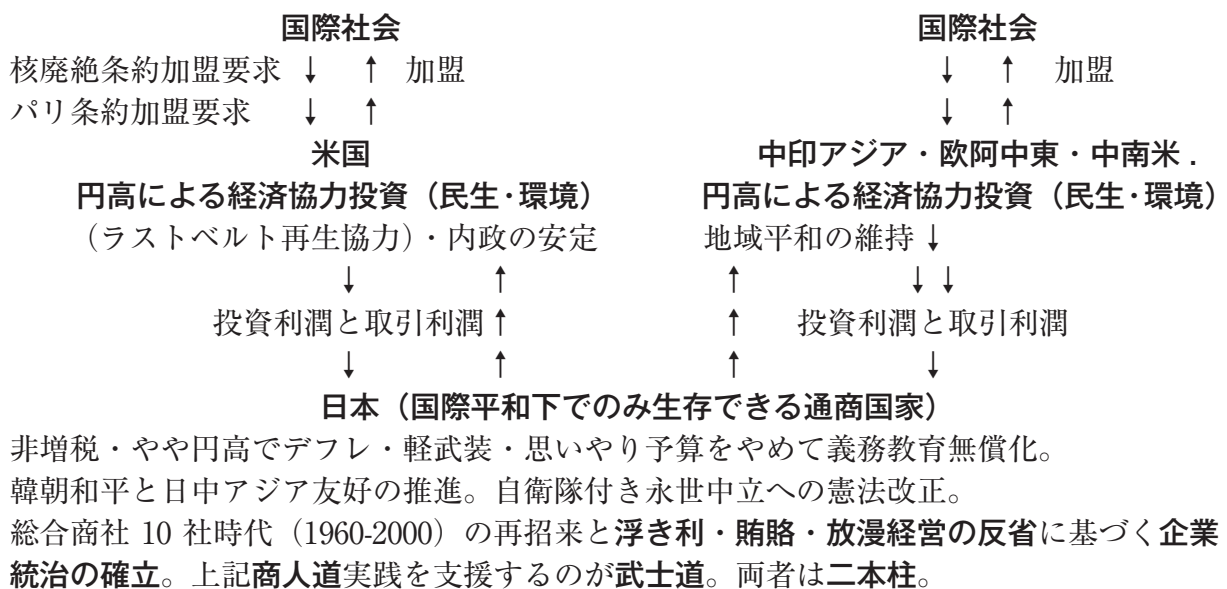
なお英米系企業は部門ごとに10%以上の利益率を要求するから総合商社が成り立たない、との説もある。

三方よしと日本の貿易 - 日本の経済と貿易のあるべき姿

(1) 現状 (=新「武家の商法」・日本伝来商人道の対極。新唯物論+新自由主義)



(2) 今後（世間よし・三方よし。国力善用・自他共栄。日本伝来商人道への復帰）



(3) 今後の総合商社の役割・・・投資と取引の合わせ技ができる、総合事業運営・事業投資会社としての総合商社は、世界できわめてまれな業態である（田中隆之）。

【参考文献】 拙著『国際事業投資の諸局面』現代図書、2004年。

会員寄稿文

「水の都・周庄－中国のベネチアを訪ねて」

中 田 龍 彦

中国の江南に周庄という水の都があります。中国出張時、蘇州からの上海への移動の折に、中国客先のアレンジで周庄を訪問しましたので紙面を借りてご紹介させていただきます。



周庄の風景

周庄の所在と起源：

中国江蘇省昆山市周庄镇は蘇州市の東南30余KMの所にある（上海から西へ車で約1時間半）。旧名は貞豊里といわれ、青浦、呉江、呉県、昆山の4市県に接している。春秋戦国時代は呉王の少子揺と漢の越揺君の領地で、揺城といわれていた。北宋の元祐元年(1086年)仏教を信奉していた周迪功郎が13㍻タールの農地を寄進して全福寺を建てた。後世の人が周氏の功績を称え、この地を周庄と改称した。

周庄の美しさ：

周庄は900年以上の歴史があり、現在でも当時の水郷の建築がよく保存されている。町全体の60%が明朝・清朝時代に建てられた建物である。僅か0.4平方キロの小さな町に約100箇所古い住宅と60余りの磚彫門楼（彫刻が施された屋根付きの煉瓦作り

の門）がある。周庄の魅力は水に囲まれた、まるで水面に浮かぶ睡蓮のような華麗さ。川に沿って街が作られ、民家が建てられている。川があり街があり、そこには必ず橋がある。川は道であり、橋は道の延長となっている。小さな橋、流れる川、素朴な民家が調和のとれた美しさをかもし出している。無数の橋が存在するが、中でも特に有名なのが「永安橋」と「世特橋」。この橋は「双橋」と称され、石造りのアーチ橋と石ずり区の梁橋からなっている。二本の川がここで合流して「十」字形を呈し、二つの石橋が連なって架けられているおり大変美しい。



双橋



富安橋遠景

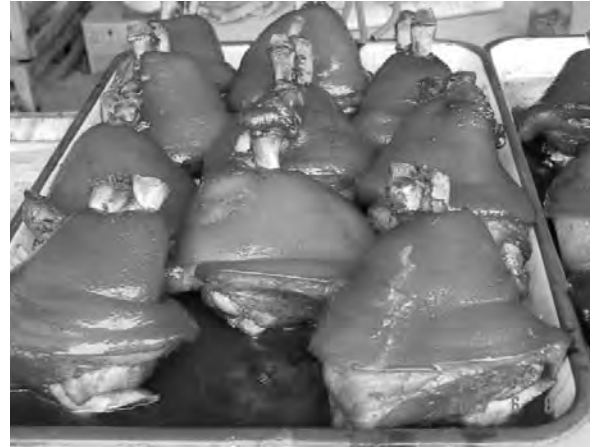
周庄の魅力：

周庄の魅力はそのまた文化の深さにある。元末・明初の大商人であった「沈万三」の末裔の建てた沈庁・明初の中山王の徐達の末裔の建てた張庁はいずれも明・清朝時代の邸宅の典型である。また迷楼、葉楚 旧居、澄虚道院、全福寺等名所旧跡は、歴史的・文化的な観点から見ても皆素晴らしいものばかりである。文化人も周庄をこよなく愛し、多くの文化人が周庄を題材に取り上げている。

周庄の味：

さて、最後に食べ物の話、前述の沈万三は「万三蹄」（まんさんてい）とよばれる料理を発明し、財を成し大富豪となった。「万三蹄」とは精選した豚の後足を原料とし、調味料を入れ、とろ火で煮るか蒸したもので、肉が柔らかく汁はあめ色で、油こくな

く塩と甘味が調和し、口当たりがよい。もともとは春節（旧正月）の酒宴のメイン料理であったが、後に賓客をもてなす料理となったもの。



名物料理「万三蹄」

皆さんチャンスがあれば是非中国のベネチア「周庄」を訪問され、「万三蹄」をご賞味されてはどうでしょうか。



Copyright© 中国まるごと百科事典 <http://www.allchinainfo.com/>

会員寄稿文

埋 蔵 銭 発 掘

奥 村 睦 夫

= 遺跡は自らを語らぬが、古人の営み、
歴史は遺跡の発掘によって語られる。

2018年3月9日、「2017年12月5日、国内最大級の埋蔵銭が発見された」と埼玉県埋蔵文化財調査事業団（埼玉県熊谷市船木台）が発表した。

要点は、

- ① 推定26万枚の銅銭が常滑焼の大甕（高さ約70cm、径約60cm）に内蔵されていた。
- ② 永楽通宝、元豊通宝、開元通宝など19種類。但し、甕底まで調査進んでおらず銅銭以外のものが出てくる可能性ある。
- ③ 発掘場所はJR蓮田駅（宇都宮線）から東北東約1.5^{km}に位置する蓮田市黒浜の「新井堀の内遺跡」で、岩附城主だった太田道灌公家臣の堀之内（館、砦）があった高台、県道建設工事を控えての発掘作業中に出現したもの。

以下、事業団係員の解説、

- ④ 地下約2mの発掘箇所手前の過去の盗掘形跡のある穴が同時に2つ発見されており、今回の箇所真上約20cmまで掘下げられた形跡もあり、もし当時、さらに30cm程度掘下げられていたら、今回の大発見はなかっただろうと！
⇒ 添付写真ご覧ください。

解説、

- 1) 発掘地は、筆者（蓮田ボランティアガイドメンバー）が蓮田の歴史ウォークで幾度も多くの市民を案内していた場所で、市内黒浜台地の南端に位置してる。
- 2) 狭い市内には確認済みだけで堀之内跡が5か所もあり、この辺りは当時の戦略上重要な位置関係にあったと見られ、15世紀半ばの（享徳の乱：古河公方足利成氏

vs 山内上杉+太田道灌）以降戦国期の最前線だったところで、当地の豪族が負け戦の際に財宝を埋め隠し再起を図ったであろうことが容易に想像できる。

- 3) 当地は縄文前期の海進による奥東京湾の最奥部に位置し、市内を南北に貫く元荒川は名のごとく、江戸初期（1629年）の荒川瀬替え前の秩父を源流とする荒川本流である。川沿いの高台には縄文貝塚、縄文環濠集落跡、たたら製鉄痕跡、多くの寺院（戦国期の戦死者を供養、神社）が点在している。

⇒歴史を辿れば、坂上田村麻呂、源義家、太田道灌、石田三成（忍城攻め）ら多くの武人達が闊歩したであろうとの伝説も残されております。

新聞、テレビ、市の広報等で大きく報じられ、市民は驚きともに「所有権は？ 価値は？ 現物はどこに？ まだあるのでは？ などなど」さまざまな噂が飛び交ったようだ。

ちなみに、文化遺産内で発掘されたものは全て国家の所有となる由。

思えば、2005年1月、今回の遺跡から数百m離れた同じ黒浜の用水路に一万円札が1500枚散乱、大騒ぎになった事あり、我らの蓮田はお金を捨て易く、また埋め隠し易いところなのかと何かしらワクワク感と期待感が交錯しております。

ここ掘れワンワンよろしく、畑、庭など密かに掘り起こしてる人がいるかも知れません。

大金を持って余し困ってる方、もちろん事件性の無い健全なお金に限りますが、当地に捨てに、或いは埋めに来られてはいかがでしょうか？ ご案内しますよ！

下記のような大騒ぎ報道が思い出されます

- ・1980年4月、大貫さんが銀座3丁目道路沿い植込みで1億円風呂敷包みを拾ったこと



大甕入りの中世銅銭



石蓋の埋設状況

- ・1989年4月、川崎市高津区の竹やぶで2.3億円入りカバンが捨てられていたこと
- ・銀座、新川あたりでビル工事の最中に大判小判などが見つかったこと



石蓋が発見された様子

- ↑ ↑
- ・円い蓋が今回の大甕
- ・手前の穴が盗掘の痕跡
- ⇒この手前に同様の穴あり

← ←

蓋の上の土色に濃淡あり、濃い部分が盗掘痕跡、蓋との間の淡い部分を盗掘者が掘り進んでいたら、今回の発見はなかった。



廣岡さん追悼

園 山 春 一



蓼科にて 2015年

廣岡さん遂にあなたの素敵な笑顔に隠された毒舌振りを見たり、聞いたり機会なくなりました。50年間お付き合いいただきありがとうございました。

最初の出会いは、パリのニチメンフランスの事務所でした。わたくしが会社に入って3年目の時であり、まだ仕事や会社のことがわからない若造でした。その生意気な若手社員を辛抱強く、懇切に教育してください感謝の気持ちでいっぱいです。

廣岡さんと言えばパリやフランスと重なる存在でしたが、わたくしにとっては、ニチメンフランスの、中興の祖と思えてなりません、パリ店を知る多くの社員の方が訪れた凱旋門近くのオッシュ通りにあった事務所は、当時飛ぶ鳥を落とす勢いのARCT（フランスが世界に誇った仮燃機）の日本における総代理権を持って日本の名だたる紡績を中心とした合織業界を席卷しました。業界から引く手あまたの、他の競合機を寄せ付けぬ名機を担ぎ注文が殺到したお陰でチメンフランスは儲けに儲け、あの凱旋門近くの瀟洒な事務所を1970年初頭に買うことができたのです。（わたくしに如何に良いものを仕入れるかの目を養えと教えてくれた商いでした）

その数年後に、AIRBUS社の日本向け代理店となり東亜国内航空や全日空に売り込みむことに成功し、再度ニチメンフランスありと気を吐いていただきました。

この商いを始めとする数々の商売を開発、促進、拡販するために廣岡さんは前後10数年をパリで過ごされ、ニチメンフランスとニチメン全体に大きく貢献されました。

一方、大阪外国語大学のフランス語科出身であられたこともあり、こよなくフランスを愛され、フランス文化全般に造詣が深かったのですが、就中、フランス料理に惚れこまれグルメ＝食通になって行かれました。何しろかの有名なMICHELINのガイドブックをトイレに持ち込み次に行くRESTAURANTの研究に余念がなかったと言われるぐらいのまいものへの探求心を持たれていたことが思いだされます。

きっと、黄泉でもどの霞がうまいだろうか、カスミの微妙な味の違いを楽しまれていることでしょう。そのうち私たちがあちらの世界で廣岡さんにお会いしたらその霞の微妙な味合いを教授いただけるものと期待しつつ合掌し追悼の言葉としたいと思います。

合 掌



フォンテンブロー城 1989年

訃 報

(2017年8月8日～2018年5月5日)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	藤 野 泰 三	機 械	2017年 8月 8日	90歳
2	赤 間 智 明	財 務	2017年 9月 6日	76歳
3	村 尾 毅	業 務	2017年 9月17日	82歳
4	中 村 昌 義	鉄 鋼	2017年10月 2日	88歳
5	澤 井 修次郎	機 械	2017年11月22日	85歳
6	※林 悟	化 工	2018年 2月10日	73歳
7	東 門 申 三	元監査役	2018年 2月19日	86歳
8	村 松 寶 夫	情シス	2018年 2月21日	75歳
9	浦 谷 弘 三	情シス	2018年 4月 1日	88歳
10	廣 岡 幹 雄	元専務	2018年 4月 2日	83歳
11	※中 井 敦 夫	織 維	2018年 4月 2日	80歳
12	※蛭 田 亨	化 工	2018年 4月20日	80歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
1	高 橋 悦 夫	機 械	2017年 9月29日	80歳
2	※吉 田 光 男	合 樹	2017年10月26日	78歳
3	大 谷 房太郎	元監査役	2017年12月25日	91歳
4	※和 田 祐 三	化 工	2018年 1月29日	76歳
5	福 田 和	織 維	2018年 5月 5日	91歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



【編集後記】

会員各位に「会報」24号をお届け致します。

今号より会報編集の大命が下り担当することになりました。長谷川初代編集長、2代倉持さんの編集手腕には遠く及びませんが、戸惑いながらも何とか発行にこぎ着けることができました。

これも、丁寧かつ親切な引継ぎ、寄稿者の皆様、役員・世話人各位のサポートの賜だとありがたく、こころより御礼申しあげます。

今後、広報チーム（昨夏、会報チームとホームページ担当が統合）が会報発行（年2回発行）及びホームページ内容の拡充に努めて参ります。

会員の皆様には、会員相互の情報提供、情報交換、随筆、エッセイ、珍譚奇譚、書評、同好会・同期会・OB会ニュース（開催予定、開催報告）など前号までの掲載文などをご参考されて、ホームページ並びに会報をご利用いただくようお願いします。

連絡先：okumura1946@canvas.ocn.ne.jp

（奥村 睦夫）

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング17F

会報発行人：石原啓資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥村睦夫

メンバー：入江隆史、北川幸雄

中田龍彦、蛭田恒美

印刷所：有限会社 関内印刷